

ご縁あり和歌山とであい

司永偉
交換留学生 中国

桜の花が咲き誇る時に日本に着き、和歌山大学に留学して来たのはご縁があったからだと思う。

留学に必要な手続きは非常に煩雑であったが、問題が起こった際は皆の力添えのおかげで無事に解決することができた。日本に来た後、いろいろな理由で他の友達と同じマンションに住むことができなかったが、幸運なことに、日本人の家でホームステイできて、大家さんのお世話になって、日本人の生活も自ら体験できた。その時、玄関での靴の並べ方から食事する時のマナーまで、日本人が日常生活の礼儀を重視することに感心した。

地元のボランティア団体の親切なお招きのおかげで、桜満開の伏虎城の下で花見をしたり、白浜の海浜で海を見てから、木々の緑に囲まれた南方熊楠の記念館を見学したりできた。その南方熊楠の記念館で、孫文が南方熊楠の日記帳に書かれた「海外逢知音」を見た時、歴史上の偉大な人物との偶然な出会いに大変驚いた。

またボランティアのグループのお誘いで、和歌山大学の経済学部の柑芦会（こうろかい）という同窓会に参加した。臨席の皆は、留学生である私達以外はほとんどが少し年配の先輩だったが、先輩方のやる気満々な様子は私に深い印象を与えた。初めてこのようなイベントに参加して、心細くなってしまった。同窓会の終わりに、ピアノの伴奏と共に和歌山大学の寮歌を歌った。初めてその美しい歌を聞いて、その雰囲気酔った。



留学の間に、私は幸運にも和歌山祭りとご縁を結び、留学生として参加できた。その豪華絢爛な行列で、厳かな神官、豪放な相撲、立派な武者、淑やかな巫女等を見ることができた。生き生きとした昔の紀州民衆の武勇が目の前に現れて

来たようだ。かつて、和歌祭りは紀州の第一の祭りであったと聞いたことがあるが、自分の目を見て、その賑やかで盛大な場面は昔の「和歌祭図巻」に描かれたものと比べるといささかも遜色もないと思う。

ある平日の朝、目を覚まし、朦朧として天井板を見つめたとき、自分はもう日本で相当な時間を過ごしたことを初めて実感した。しかし、なぜ何でもない朝、夢から覚めた後にこのような気持ちになったのだろうか。やはり自分は時間の流れに鈍感な人だと思いながら、時間の過ぎる速さを嘆いた。

ここで過ごした日々の中で、平々凡々なことは多いが、私はこの静かで楽しい日々をとてても大事にしている。このような日々は、静かであろうが、賑やかであろうが、いずれも私にとって貴重な記憶だ。